

マチュピチュ



アンデス山中に眠るインカ文明

胸を突くような急傾斜の山肌を、小型バスで登り、岩だらけの山の斜面を5分も歩いた私は、突然、眼前に広がった視界に「アッ」と驚きの声を上げてしまいました。「なんとという荘嚴な遺跡! しかもこんな高い山の頂に!」。それはまさに“幻の空中都市”の名にふさわしい光景でした。



山の中腹から山頂にかけて段々畑にも似た石造りの市街地の跡が続いています。王宮や寺院だったらしき跡もある。向こう側にそびえる山の頂にも神殿らしい遺跡が、雲と霧の中で見え隠れしている。眼下には、アマゾン川の源流の一つウルバンバ川が千尋の峡谷を作り、その川音が岸壁をよじ登ってきて耳に響く。雲霧行き交うこの山の頂に、いったい何の目的で、どのようにこの石造都市を築いたのだろうか。歴史学者にかぎらず、一旅行者にとっても、マチュピチュほど不思議で魅力ある遺跡はないでしょう。

前日はインカ帝国の古都クスコを訪れていました。標高3400m。8月だというのに、吹き抜ける風は肌を刺すように冷たい。インディオの露店からリヤマの毛のセーターを買い求め、「高山病の予防に」と勧められてマテ茶を飲む。クスコからマチュピチュへは高山鉄道が走っています。列車はアンデスの山中をゆっくりと、また何回もスイッチバックを繰り返しながら進んでいきます。4時間ほどで終着駅へ。そこから小型バスで、高さ500m以上の山の断崖を、日光の「いろは坂」方式で上りつめたのです。



1531年、スペインの征服者ピサロが165人の部下を連れてきたとき、中央アンデスを支配していたインカ帝国のアタウルパ王の下には約1万の兵がいました。兵の絶対数ではとてもかなわない。そこでピサロは奇策をめぐらし、平和交渉をすると見せかけて、まんまと王を虜にしたのです。ピラミッド型の指揮系統にあったインカ帝国は、王を失うとたちまち崩壊してしまいました。インカ兵にとって、スペイン兵の用いる鉄砲と騎馬は大変な脅威で、それまで見たこともなかった馬は“四足の怪物”くらいに思えたかもしれません。

こうして、栄光を誇っていたインカ文明も歴史の舞台から消えてしまいました。そして遺跡は1912年、アメリカの考古学者ハイラム・ビンガムが乙女蒸発の伝説に惹かれて調査・発見するまで400年近くもアンデスの山中深く眠っていたのです。

かくも見事なマチュピチュの廃墟に立つと、ティオティワカンのピラミッドに代表されるアステカ文明や、ユカタン半島のマヤ文明とあわせて、とめどもない歴史への感慨が胸を去来するのです。

